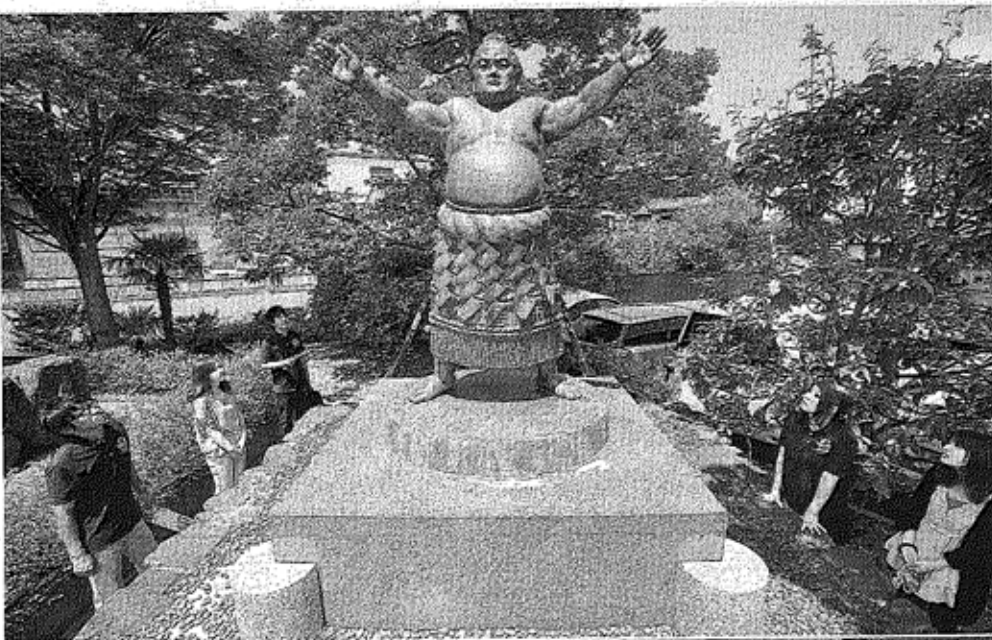


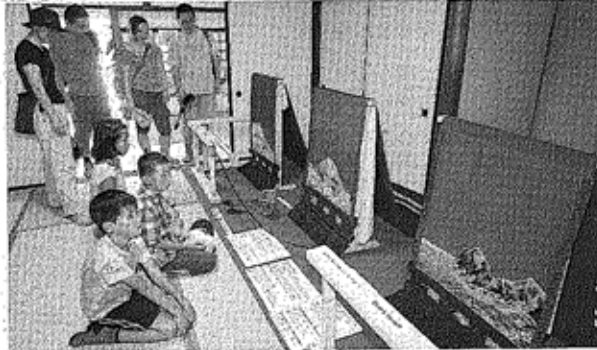
先人を訪ねて

青空と深緑を背に、両手を広げた第53代横綱琴桜の銅像が立つ。鳥取県倉吉市の市街地は、赤瓦に白い漆喰壁の土蔵群が残り、江戸時代の雰囲気を感じる。その街並みの玄關口で、銅像が観光客を迎える。右手の方向に打吹山(204m)を望む。麓には、しこ名の由来となった桜の名所・打吹公園がある。力のこもった押し相撲から「猛牛」と愛された琴桜でも、この街の人たちは、土俵の上での厳しさだけでなく、故郷で見た温厚で謙虚な人柄に惚れ込んだ。慕う気持ちが、街おこしの原動力になった。

琴桜 先代佐渡ヶ嶽親方 (鳥取県倉吉市)



●白壁土蔵群入り口に立つ琴桜の銅像。観光客を出迎えているように化粧回しなどが展示されている琴桜記念館。新たな観光拠点になっている(鳥取県倉吉市) 一農村茶洋撮影



ことさくら 1940~2007年。本名は鎌谷紀雄。1959年初場所で初土俵を踏んだ。身長1m82、体重150kg。相手を引き込んで投げを狙う柔道の癖が抜けず、兄弟子の元大関琴ヶ浜らに鍛えられた。後に「琴ヶ浜のおかげで横綱になれた」と振り返った。立ち合いで頭から

ぶちかまし、左のど輪、右おっつけで押しまくる相撲が身上。けがに苦しみ、73年に32歳で横綱に昇進し、「運咲きの桜」とも。幕内優勝5回で、74年に引退。師匠の急逝で第12代佐渡ヶ嶽親方となり、琴風(現・尾車親方)、琴歐洲、琴光喜、琴奨菊の4大関らを育てた。

高校時代、怪力を発揮してラムネ瓶入りの箱10個を担いで配達のアルバイトをしたという逸話が残る。働いていたラムネ工場は、当時の看板を残して観光案内所になった。

立)成徳小学校時代、初夏の内行事「萬葉まつり」で活躍した。新川裕三校長(56)は「懸命に戦う子どもたちに、少年時代の自分を重ね合わせていたのかもしれない」と話す。

今年7月には、市が町家を改装して「琴桜記念館」を開設。満開の桜と打吹山をあしらった化粧回しや、天皇賜杯のレプリカなど約50点が並ぶ。ここは観光拠点であるとともに、古くからの後援者らにとって思い出を語り合う場でもある。

中学生になると、警察官だった父の勧めで柔道を始め、すぐに黒帯を取った。相撲にのめり込むきっかけは、県立倉吉農高で助っ人として出た相撲の県大会。あっさり優勝し、全国大会でも3位に。それが第11代佐渡ヶ嶽親方(元小結琴錦)の目に留まった。

親方時代に部屋を訪ねると、ひよろりと背の高い外国人の弟子がいたので、「あんなに細くて大丈夫か」と聞くと、にやりと笑って「将来、大関になる」と断言。琴歐洲を見るたび、その時のことを思い出します。

鳥取県佐渡ヶ嶽部屋後援会副会長の坂根国之さん(71) 琴桜は倉吉農高時代の同級生です。入学した時には既に有段者でしたが、練習では初心者にも優しく、親切に投げ技の基礎を教えてくださいました。

大関を含む20人を超える関取を育て、名伯楽とうたわれるのもうなずけます。白壁土蔵群の美しい街並みを楽しみながら、琴桜の足跡をたどってください。

素質見抜く名伯楽 鳥取県佐渡ヶ嶽部屋後援会副会長の坂根国之さん(71) 琴桜は倉吉農高時代の同級生です。入学した時には既に有段者でしたが、練習では初心者にも優しく、親切に投げ技の基礎を教えてくださいました。



優しき「猛牛」 顕彰機運

は、毎年4月に「桜まつり」が開かれる。引退から5年後の1979年、市民有志が業績を顕彰しようと始めた。琴桜は「何

か手伝いたい」と喜び、亡くなる直前まで琴歐洲ら弟子を連れてやってきた。

命に戦う子どもたちに、少年時代の自分を重ね合わせていたのかもしれない」と話す。

その姿に打たれた岸田さんは「親方との出会いや付き合いで人生が変わった」と言う。自らも脱サラし、故郷の経済を支えたいと商業施設の経営に励む。

顕彰の機運はまだまだ衰えない。輝かしい経歴以上に、その愛郷心が人々の記憶に刻まれているからだろう。

(鳥取支局 上田貴夫)

【交通】銅像や琴桜記念館がある白壁土蔵群へは、米子自動車道湯原インターチェンジ(IC)から車で40分、中国自動車道院庄ICから1時間。JR倉吉駅前からバスで15分

【周辺】白壁土蔵群は、鳥取市出身の漫画家谷口ロローさんの代表作「遙かな町へ」の舞台でもある。作品に登場するスポットを巡る町歩きが楽しめる

【名産】メロン、スイカ、梨など果物の産地。石谷精華堂(倉吉市)の「打吹公園だんご」は琴桜の好物で、帰郷時は必ず店を訪れた

【問い合わせ】倉吉市観光交流課 ☎0858・22・8158、琴桜記念館 ☎0858・22・4608

記念館を運営する「NPO法人未来」理事長の岸田寛昭さん(57)は19年前、桜まつりが縁で琴桜と親しくなった。親方になった琴桜は帰郷すると、亡き後援者の家十数軒を回っては「お世話になりました」と線香を供えた。道で会う人には誰彼なく頭を下げた。「おかげさまで」が口癖だ。